２０１９年度
大学院奨励研究員研究報告書

２０２０ 年 ３ 月 ２４ 日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	孫嘉寧　　印

指導教員

所属・職名	社会学研究科・教授
氏　　名	桑山敬己　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	桃太郎昔話の地域的展開と伝承の語り直し――岡山地方を中心に
採用期間	２０１９年　４月　１日　～　２０２０年　３月　３１日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先：　所属研究科事務

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

図書	著者名	孫嘉寧	論文題目	「桃太郎」と伝説の「語り直し」	
	書名	『民俗学読本――フィールドへのいざない』晃洋書房		発行年月	頁
				2019年11月	総頁：248
					担当箇所：39-58

図書	著者名	孫嘉寧	論文題目	「日本」を追い求めて ――文化を共有することとは――	
	書名	『人類学者が語る異文化体験:16のフィールドから』ミネルヴァ書房		発行年月	頁
				2020年12月（予定）	総頁：未定
					担当箇所：

図書	著者名	孫嘉寧	論文題目	担当項目「夢占い」、「パナンペ・ペナンペ譚」	
	書名	『アイヌ文化史辞典』吉川弘文館		発行年月	頁
				2022年10月（予定）	総頁：600(暫定)
					担当箇所：項目189、

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本昔話学会　2019年度大会	開催地	大阪市立大学杉本キャンパス
題目	昔話の語り直し――吉備国の桃太郎を中心に――	発表年月日	2019年7月7日

学会名	関西学院大学世界民俗学研究センター 2019民俗学サマー・セミナー	開催地	関西学院大学梅田キャンパス
題目	理論との付き合い方	発表年月日	2019年9月2日

学会名	日本文化人類学会　第54回研究大会	開催地	早稲田大学戸山キャンパス
題目	岡山と香川の桃太郎伝説の比較 ――伝説の語り直しに関する一考――	発表年月日	2020年5月31日（予定）

研究経過状況（３０００字程度）

はじめに

奨励研究員として研究を進めてきた本年度において、刊行予定のものを含め、3 本ほどの出版物を結実させており、さらに一年以内で博士論文を提出する予定になっている。

筆者の博士課程の研究テーマと修士までの研究テーマとは、伝説や昔話など伝承についての関心という点では一貫している一方、内容面では対象(北海道アイヌの伝承から岡山地方の伝承へ)の切り替えがあった。これらの研究テーマについて、引き続き関心を持ち研究の視野を広げ、将来に繋げ・纏めていきたいと考えている。また、留学生であるということをポジティブに生かしていきたい所存である。こうした観点から、現在のテーマに限らず発表を行ってきた。

博士論文の研究について

研究概要

本研究では、桃太郎の伝説を地域のコンテクストで語り直す事象に着目し、ローカルな歴史と文化の表象・再表象をめぐり、温羅伝説の伝わる岡山と、島の遺跡と陸の神社を利用して独自の桃太郎伝説を作り上げている香川の事例を見ていき、地域における伝説の語り直しの動きを比較して考察する。そして、フィールドワークおよび文献資料の分析を通じ、伝承の語り直しを通した地域アイデンティティの再構築過程を明らかにし、矛盾を内包する揺れ動く地域アイデンティティのダイナミズムを考察する(ここでいう「地域アイデンティティ」は、土地・地域のシンボルとしての意味合いを込めて、人ではなく地域=場所に付随するアイデンティティ概念として提起したい)。

研究手法

博士論文では、文化人類学の方法論について再考し、今日において規範となったマリノフスキー型のフィールドワークには、長期間滞在という規範、インフォーマント/コラボレーターを人間に限る姿勢、文字資料を軽視する傾向といった問題点があることを指摘する。それを踏まえて、「文献資料ありきのフィールドワーク」、「リピーター型の旅するフィールドワーク」、「『もの』のインフォーマント/コラボレーター」、「中間媒介者に注目するアプローチ」を軸とするオルタナティブな手法を提起したい。

研究内容

1、岡山の事例:

岡山市を中心に、旧備前・備中地方に伝わる温羅伝説では、天皇から派遣された吉備津彦は桃太郎の原型と言われ、吉備の地で平定された凶暴な統治者である温羅という大陸・朝鮮から渡来した製鉄技術を持つ者が鬼とされる。今日、温羅伝説は地域の「歴史」と強く連結され、地域の文化的記憶を語り直しており、独自の歴史・文化意識を維持・再生産している。

そして、温羅伝説と関連付けて、吉備津地域には古墳群を中心とする地方の有力政権=吉備国が存在したとして、地域の歴史を再構築する言説があり、吉備国という前近代ひいては古代の枠組みを引き継ぐ(またはその範疇概念を掘り起こして再創造する)試みが見られる。ローカルな「歴史」を、伝説の語り直しを通して資源化し、他者との差異化に利用しつつ、その語り直しの過程で自らの歴史の物語を作り出すサイクルが認められる。

また、温羅は両義的な存在である。温羅伝説には数重もの対立構造があり、その語り直しにはねじれと反転が認められる。温羅は「裏」のテーマとして、伝承の語り直しにおいて常に地域の関心を引きつけ、地域の視点は桃太郎・吉備津彦と鬼・温羅との間を揺らぎ続けていることが分かる。さらに、今日では、「桃太郎対鬼」と言う図式は、「桃太郎と鬼」、ひいては「鬼と桃太郎」にシフトしている。

2、香川の事例:

香川鬼無・女木島の事例では、吉備津彦の弟にあたる稚武彦が桃太郎の原型とされ、高松港沖合にある女木島を牙城としていた海賊が鬼とされる。海賊退治はローカルな文化的記憶として桃太郎伝説の中で語り直される。

香川の桃太郎伝説では、桃太郎のモチーフに引き寄せ、「桃太郎」や「鬼」の持つ象徴的な力を取り入れようとし、伝承と史跡の意味付けに変化が見られる。その点では岡山の事例と同様である。しかし、香川の場合、地域固有の要素は二次的に扱われ、桃太郎昔話のモチーフを優先する傾向が見られる。「桃太郎」や「鬼」など全国的・標準的な昔話に基づいたキャラクター化と脱文脈化したキャラクターの「一人歩

き」という事象が顕著である。香川の桃太郎伝説の語り直しにおいて、ローカルな伝説の地域性・個別性を示すはずのところには、昔話の一般的・標準的な要素がしばしば混在している。そして、ローカルな文化的記憶の再構築や地域的要素がある程度認められる一方、地域色を持つ伝説の基盤は比較的脆弱であり、昔話の持つ普遍的要素がより色濃く認められる。

3、桃太郎伝説語り直しの起源:

以上のように岡山および香川における地域の伝説が桃太郎の昔話と結びつけて語り直される動きの起源を辿った。それは、1930年代に始まる戦間期の日本における観光事業の推進による競争や郷土意識の発展と関係していたことが分かる。

語り直しは、一方では地域の歴史を再解釈して地域文化を創造することを通して、自分語りとして自らに向けて地域の自画像を書き直すことであり、郷土意識さらには地元のアイデンティティを強化する。もう一方では、それは観光の文脈と緊密に関連しており、常に他者を意識して彼らの視線の中に自らを客体化して、観光客に向けて自己のイメージを発信することでもある。桃太郎伝説の語り直しにも、こうした観光競争と地域アイデンティティの増幅が相互作用する背景があったと考えられる。

4、岡山と香川の事例の比較:

まず、拙稿「『桃太郎』と伝説の『語り直し』」からさらに考察を深化させ、伝説などの伝承を用いた地域の歴史ひいては文化に対する語り直しをパターン化して、さらに分類する試みを行った。岡山と香川の桃太郎の語り直しから、対照的な二つのパターンを見出すことができる。パターン①、昔話・説話のモチーフを「流用」・「利用」する温羅伝説を、「昔話の伝説化」と呼び、パターン②、昔話・説話のモチーフに「利用」される鬼無女木島の桃太郎伝説を「伝説の昔話化」と呼ぶ。どちらかのパターンがより優れたということではなく、伝承の語り直しは昔話的側面と伝説的側面の二面性を伴い、そのどちらを強調するかで語り直しのパターンは異なる方向性を持つのである。

それから、前近代・非公式・ローカルの範疇意識の有無によって、岡山と香川の語り直しは「再構築型」と「創造型」に分類できる。前近代の行政・文化的範疇の継承という観点から見れば、岡山の語り直しでは「吉備国」という古代史を再構築する試みであり、地域の観光・文化資源の調整、統合と共有にも繋がる。一方、香川の事例では非公式でありつつ「昔ながら」の枠組みを動員して統合するという側面がそれほど見られず、逆に言えば、近代的枠組みが顕著であるという点では岡山と大きく異なる。

最後に、桃太郎の語り直しとは、桃太郎昔話＝「みんなのお話」と、温羅伝説・香川の桃太郎伝説＝地域「私たちのお話」とを関連つけることである。そこには桃太郎の普遍性vs鬼のローカリティ、中央権力・日本国家を代表するシンボルとしての桃太郎vs特定地域のローカルな歴史や文化から生まれるシンボルとしての鬼という図式がある。岡山の事例では特に、桃太郎にまつわる伝承の語り直しには、「表」(標準化した「桃太郎」の鬼討伐を中心とする全国的な桃太郎昔話)の共有を前提とした「裏」の物語(温羅のように地域独自の「鬼」を/もフォーカスする地域的な桃太郎伝説)の提示という側面、語りの二重性が見られる。そして、桃太郎伝説の語り直しでは、「鬼の逆襲」あるいは「鬼の台頭」とでも呼べるような動きが出てきていることを指摘したい。「裏」である鬼のシンボルおよびそれを巡る言説は、「表」の主役である桃太郎にも匹敵する力を持ちつつある。そこには、国民国家の枠組み内で他者性・異質性を主張し、地域の主体性や公式制度とは異なる連帯意識を重視するナショナリズム・国民意識の変容と成長が反映されていると思われる。

展望:

博士論文の完成後は、桃太郎伝説というコンテンツと、伝承の語り直しという事象を二つの切り口として、考察の間口を広げて研究を進めていきたい。将来的には、これまでの研究テーマと自分自身の文化的背景を活用して、アイヌの伝承や中国の伝承をも取り入れて、スケールの大きい比較・総合研究を試みたいと考えている。

謝辞:

本年度は奨励研究員としてご支援いただきながら研究を進めることができ、心より感謝申し上げます。

以　上